

また、仏教と神道という二つの軸(『近代的な宗教概念』の設定は、世界遺産登録に必要な文化の「普遍性」と「土着性(地域性)」に容易に対応させることができる。従って、日本の仏教と神道をめぐる近代的概念は、世界遺産の理念にむしろ適合的であると言えよう。

世界文化遺産に登録されている神社、宮は、外国人観光客も訪れる一大観光地ともなっている。そこを研究する、人文的な研究者側は近代の脱構築に向かうが、世界文化遺産の現場は、世界文化遺産という「お墨付き」を契機に観光振興を目指す傾向にある。だが、観光の現場で消費されるのは近代の宗教的図式であり、それを乗り越えようとするアカデミズムの成果は、観光の現場には反映されない。むしろ観光の現場は、モダンとポストモダンの断絶を表しているかのようにも見える。

二大霊場巡拝者の実態

——四国と西国を比較して——

柴谷 宗叔

四国八十八ヶ所と西国三十三所の二大霊場について巡拝者の実態を調査した。その結果、四国遍路は大別して三つのタイプに分かれること、西国は四国に比べ観光的要素が強く、徒歩巡拝はほとんどいないということなどが裏付けられた。

巡拝者がどこから来ているかを見ると、四国遍路の場合、全国的な広がりを見せている。地元四国からが二二%だが近畿からが三〇%とこれを上回り、以下、関東一四%、中部一一%、

中国八%など。西国は地元近畿が六六%と三分の二を占め、中部が二〇%で三十三番札所が岐阜県で中部に在ることを考えれば、なんと八六%が地元で占められていることになる。全国区の四国、地方区の西国という差が現れている。

四国について地域と日程の相関をみると、地元四国の人たちは車の日帰り、家族、知人など小グループで巡拝する。近畿、中部など中距離地区からは団体バス(あるいは車)の区切り打ち。関東以遠の遠距離地区からは徒歩(か公共交通機関利用)の単独行動で通し打ちというスタイルが多いことがわかった。西国では日帰りが七五%を占め、地元近畿の人が車の日帰りで回っているという構図がわかる。徒歩は〇・三%(実数二)で誤差の範囲でゼロに等しい。

動機(複数回答)は四国、西国ともに過半数の人が先祖等の供養を挙げ、近しい人の死が遍路にかきたてるという構図が浮かび上がる。観光目的は西国が二〇%、四国が九%で、西国が四国の二倍以上の比率となっているのが特徴だ。プロフィールを見てみると、四国、西国ともに六十歳代が四割以上を占め、定年退職後に巡礼に出るというケースが多いという図式が浮かび上がった。調査は二〇〇四年から二〇〇五年にかけ、各二千枚のアンケート用紙を配布。回収率は四国二五・二%、西国一四・二%。

西国ではなぜ徒歩巡拝が廃れたのか。これは鉄道の発達と大いに関係がある。一八七四年以後、関西圏には鉄道網が張り巡らされていく。都市間を結ぶのみならず、有名な寺社への参詣の便が図られる。現在も公共交通機関が利用できない寺は、ご

くわずかである。

歩くしかなかった巡礼道が、交通機関利用の札所巡りに変貌していく。京都、大阪、奈良といった、都市周辺の札所が多い西国にあつては、かつての巡礼道は忘れ去られ、巡礼宿も廃業していく。明治後期から大正にかけ、すでに現在に近い巡礼スタイルになったものと思われる。荻原井泉水(一八八四—一九七六)の『観音巡礼』(一九二八)には、「徒歩する者は洋服にリュックを負うたあるかう会の会員といふてあひか、運動会気分のおばあさん連かになつてしまふ」と記し、「先を急ぐほんとうの巡礼は却て電車に乗る」と明言している。このことから、当時の巡礼が鉄道を積極的に利用していたことがわかる。というか、徒歩巡礼は昭和の戦前にしてすでに異端であつたのである。

一方、四国は鉄道の発達が遅れた。各県を結ぶ幹線は高德本線は一九三五年、予土線の全通に至つては一九七四年である。都市周辺の一部札所を除いては鉄道の恩恵をこうむることはできず、昭和になつても、昔ながらの徒歩遍路をするしかないのである。現在まで連綿として徒歩遍路が続いているのは、西国と異なり交通の便が悪かつたゆえに徒歩の遍路道が保存されてきたこと、そして同様の理由で、遍路宿が残っていたことに尽きるといえる。

三月の東日本大震災以後、四国遍路の数が減つたと聞くが、遍路宿に宿泊する関東以北の巡拝者が減つたのが影響していると思われる。日帰りが主体の四国、近畿からの巡拝者はもともとあまり宿泊しないからである。

四国遍路のグローバル化に関する一考察

浅川 泰宏

近年、聖地・巡礼が世界的にブームである。リーダーによれば、ヨーロッパのカトリックの巡礼地では一九九〇年代後半から例外なく大幅な巡礼者数の増加があり、インド、アメリカ、サウジアラビアなどの多くの聖地・巡礼地でも同様の傾向がみられ、巡礼者の相互交流も盛んになっているという(イアン・リーダー「現代世界における巡礼の興隆―その意味するもの」(国際宗教研究所編『現代宗教二〇〇五』東京堂出版、二〇〇五年)、二七九—三〇五)。日本の四国遍路でも巡礼者数が増加した。佐藤久光によれば、一九七〇年代後半から二〇〇〇年代にかけて四国遍路の巡礼者数は、二万人弱から八万人強と四倍以上になったという(佐藤久光『遍路と巡礼の社会学』人文書院、二〇〇四年)。遍路姿の外国人を見かけることも増えてきた。Lonely Planetに四国遍路の記事が掲載され、歩き遍路のバイブルといわれているガイドブックも英訳されたり、英語、中国語、韓国語などの地図やパンフレットが作成・配布されたりするなど、外国語による情報も流通するようになった。ある伝統的な聖地や巡礼が、その「伝統」を支えてきた地域社会を越えて広く外部に知られるようになり、また外部からの巡礼者が訪れるようになる状況を、当該の聖地・巡礼のグローバル化と呼ぶならば、四国遍路においてもまさにそうした状況が進んでいる。こうした動きに今後、大きく影響すると思われるの